

「がん診療レジデントマニュアル」

国立がんセンター中央病院内科レジデント 編集

県立愛知病院

有 吉 寛

日本では今世紀初め、がんの死亡数が全死亡数に占める割合は2～3%と言われていた。しかし、がんによる死亡は年々増加し、1981年には第1位となり、世紀末の最近では全死亡数に占めるがん死亡数の割合は25%と、その増加傾向は止まらない。こうした状況から一般的には、がんは死病であると認識されている。一方、がんの治療率も近年漸増し、約50%前後の治療率が報告されている。その理由として、がん知識の普及、各臓器がんの早期発見の努力、各種がん診断法やがん治療法の進歩など、多くの複合的要素が考えられている。このため、がんの生物学をよく理解した専門性の高い臨床腫瘍医が、何が標準的治療で何が研究局面的治療かを理解し、患者のインフォームドコンセント(IC)を基本としてがんの診療を行う必要がある。

しかし、がん専門病院以外でわが国の診療体制に臨床腫瘍医の集団は少ない。一般的に肺がんは呼吸器科の一領域であり、胃がんや大腸がんは消化器科の一領域の疾患と考えられている。いわんや、進行期で薬物療法が必要な卵巣がんや子宮がん、あるいは進行期で薬物療法の必要な前立腺がんや膀胱がんを内科医が診ることは極めて少ない。換言すれば、わが国のがんの診療は臓器に依存し、がんの生物学に基づいてがん診療を行うという臨床腫瘍医は存在せず、特にがんが全身化した進行病期のがん治療を薬物療法で行う内科臨床医というカテゴリーはない。旧態依然たる大学の医学教育に腫瘍学の講座はなく、社会のニーズに答えていない。抗がん剤の知識の乏しい臨床医が安易にがん化学療法を行うなど、日常がん臨床も大きな問題を抱えている。

こうした背景を極めて強く意識して、腫瘍の臨床が正しく行われるべきという目的のために国立がんセンターのレジデントが、自分たちが教えられ、経験した腫瘍学を基に刊行したのが「がん診療レジデントマニュアル」である。まず、そうしたレジデントの意識と、レジデントにその意識を植えつけた国立がんセンタースタッフの熱意に敬意を表するものである。近年は部厚い教科書より、使い勝手の便利なマニュアルものの刊行が多いが、本書のようにその作成意図が現在の医療に内在する矛盾を正す意味で編集されたものは少ない。

各論的には限られた頁数の中で手際よく内科腫瘍医に必須の知識が適切な項目配置と適切な内容記述によりまとめられている。初めにICとがん告知を配したことは、それらががん医療の中心になってきている現状において極めて妥当であり、前述した正しいがん医療への意識が強く感じられる。次に、内科腫瘍医に不可欠ながん化学療法の基礎知識が簡潔にまとめられており、この数頁を熟読すれば、がん化学療法を科学的根拠に基づいて行う必要性が理解できる。

各種がんは疫学、診断、分類、病期診断、予後因子、治療などの項目に分けて過不足なく語られている。特に、標準的あるいは繁用される化学療法と研究的化学療法を明確に分類して記載し、その具体的施行の重要ポイントが的確に記載されている。肺がんと乳がんの記載が詳しいことが印象的である。

幹細胞移植は先端医療として必要な知識が盛り込まれており、がん性漿膜炎、感染症、がん疼痛の治療はいずれもがんの日常臨床で遭遇する非常に実際的な問題であり、その基

本的対応を身につけるうえで有用である。がん化学療法の副作用としての骨髄抑制に対するG-CSF製剤の使用につき、ASCOのガイドラインを日本の現状との差を意識させつつ記載したのは適切と評価できる。今後わが国でも検討しなければならない問題である。

緩和医療はすべての内科腫瘍医が身につけるべき要素である。なぜならば、現在の日本ではがん末期医療の症状コントロールと精神的ケアを内科腫瘍医が行われなければならない。特に、精神的ケアを心理療法専門家に依存する体制は整っておらず、主治医が患者との人間関係確立によって対応している現実を考えると、がん医療体制の問題点をここでも浮き彫りにしている。

臨床試験の項が最後にある。がん化学療法は基本的にはまだ研究段階の治療であり、標準的治療と言えるレジメンは少ない。臨床試験はICを核としたがん医療の中で大きな領域を占めており、その意味でがんの臨床では臨床試験の意義を理解することが不可欠である。また、各項目の中で「Memo」として用語説明があり、普段使用している何気ない言葉を正確に理解することに役立つ。

細かな点でときに気になるところもあるが、実に適切に編集されており、レジデントばかりでなく、内科腫瘍医や外科、婦人科、泌尿器科、放射線科などの腫瘍領域を専攻する医師の必携マニュアルとしても推薦できる。優雅な音楽の小品やスマートな短編小説を「珠玉の小品」と賞嘆するが、私は本書を「珠玉のがん診療マニュアル」と評価したい。

● B6変 頁296 図20 表60
1997 定価(本体3,800円+税)
〒400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)